身ぶりとことば

――昭和51年度始業講演（短期大学部）――

小　林　祐　子

皆さんは“One swallow does not make a summer”という英語の諺をきいたことがありますか。日本でならさしずめ“One swallow does not make a spring”といった方がよいのかも知れません。肌をつきさす北風が吹きやんだある日，ふと空を見あげると，つばめが1羽かすめとんでいく，いよいよ待望の春だなどと早合点してはならない，仲間はずれの気まぐれつばめかも知れないのだからと，自分の限られた経験から安易に一般論をひき出すことをいましめたものです。たとえば，今日私の話をきいて面白くないと思ったとき，これを一つの退屈な経験ととらずに，女子大の講演はすべて大同小異ときめてかかっては困るということです。

私がこの諺をもちだしたのは，本年度の講演の皮切りをする心理的負担を軽くしたいという下心があるからともいえますが，もっとまじめに，今日取上げる異文化との接触に関連して，心に留めるべき警告を発していると思うからです。外国の文化，とりわけ言語を扱う際に，たとえば，「つばめ」は“swallow,”「夏」は“summer”と，違った言語に属する2つの単語を，ただ字づらの意味があっているからといって，全く「同じ」ときめてしまったり，あるいは，自国文化で「うぐいす」と「春」との間に記号関係が成立しているからといって，他の文化でもそうに違いないと安易に思いこむことが，どんなに対象を見誤ることになるか，皆さんと一緒に考えてみようと思ったからです。

私の知合いに，日本語専攻のアメリカ人の大学生がいますが，或日，雑談をしていたとき，突然次のような質問をしてきました。日本語では，人を内

に招き入れるとき，「お入りなさい」と「おあがりなさい」の２つの表現が使いわけられている，私の観察したところでは，後者は主として，玄関先の人間に使われるようだが，この場合何を「あがれ」というのか，のぼるべき高いものなど玄関にないではないか，というのです。私は彼にいわれるまで２つの表現を自分で使いわけているなどと意識したこともありませんでした。いわれてみれば，なるほど現代風の日本家屋では高い上りがまちも姿を消しつつあります。それでも，一向におかしいとも思わずにこの表現を使っていました。それほど言語というものは習慣的要素の強いもので，現実と矛盾した表現であっても，それに気付くことはほとんどないようです。

考えてみますと，私たちが母国語を習い覚えるまでの試行錯誤の時代，理屈通りにいかない言語を理屈通りに使って，親に直され，次第にその言語に特有の表現法を身につけた部分がかなりあります。「ママがいた」「パパがいた」「猫がいた」といえるようになった子供が，その規則性を応用して「ボクの靴がここにいた」とやれば，途端に直されます。このようにして，言語の恣意的なとりきめを身につけると，もうそれ以外に現実を表わす方法がないと思うから，言語とは不思議なものです。

ことばばかりか，私たちが繰返ししめす身ぶりもまた習慣の強制力によって身についたものです。人の話をききながら，私たちは自然に「頷き」ます。即答をためらうときは，「さあ」といいながら，いつの間にか「首をかしげ」ています。ほとんど無意識にやっていますので，人間の本能的な行為ぐらいに私たちは思っていますが，これまた文化的に学習したものなのです。

このように，ある集団に属している人が共有し，習慣という形をとって，世代ごとに次々と伝えていく思考・行動様式といったものを，人類学や言語学では「文化」と呼んでいます。ことばは，まさに「文化」であり，慣習の伝承に担うその重要な役割からいって，ことば以外の文化と密接な相互関係をもっています。

慣習の力は，人間のあり方を深いところで規定していますから，異なった

文化に接しても，自分の文化的尺度でしか，なかなかものを見ることができません。最近，私は日英の身ぶり言語の比較を試みたのですが，自分がいかに，英語国民の言語習慣や生活習慣を，日本の文化の枠のなかにひきこんで見ようとしているか思い知らされました。同時に，英語国民もまた日本の文化を，彼等の文化の枠のなかで捉えようとしていることに気がつきました。このような理解の仕方，いわば自国の文化を規準にした“One swallow makes a summer”的一般化が，どんな思い違いをよぶものか，私の経験のなかから具体例を拾ってみたいと思います。

私が身ぶり言語に関心をもったのは，誤訳という純粋にことばの問題がきっかけです。小説のなかで，人物の表情や身ぶりに関する文章表現は，簡単な言葉遣いにもかかわらず，間違って解される率が非常に高く，不注意な翻訳家を待ちうける一つの落し穴とされています。

私が担当する「アメリカ小説」のクラスでも，学生はごく平凡な身ぶり描写にあっさり足をすくわれてしまいます。ある小説で，一人の富豪が失跡した妻を探すために雇った探偵をどなりちらす場面がありました。どなられた探偵氏は，“Please!”といって，“He raised his hand.”という動作をしながら，“Dont get mad at me.”と言ったと書いてありました。これを読んだ学生の多くは，探偵が「どうか腹を立てないでほしい」と拝むばかりに懇願したと，とってしまいました。「手をあげる」といっても，どの程度，どうあげたのか，与えられた表現だけでは分りません。結局，日本人的感覚で状況判断し，「まあ，そういきりたたないで」と「しずめにかかった」手を，懇願の手に仕立てあげてしまったのです。

間違いをするのは日本の学生だけではありません。夏目漱石の『草枕』の英訳には，これを丁度裏返したような間違いが見られます。塩田という老人から，「余」なる若い画工が，秘蔵の端渓をみせられ，「俗っぽい」と一蹴する場面があります。老人は画工のことばをさえぎって，話は最後まできくものだと端渓のいわれを語り続けるのですが，その姿を漱石は，「まあといわぬばかり手をあげて」語り続けたと記しています。「　」の部分が翻訳に

あらわれると，“Mr. Shioda raised his hands in a horrified gesture...”となり，塩田老人，両手を大仰にあげて大変な取乱しようです。古老の枯れた落着きはみるかげもありません。ここでは状況が西欧風に解釈され，「制止」の手は何たることかと嘆く「いらだち」の手におきかえられています。

以上の誤訳の例を見ると，自分の文化で当然とされることと，相手の文化で当然とされることが，見事に喰い違うとき，誤訳がおきていることに気がつきます。ことばに表われない表現の前提ともいうべきものを，自己の文化の類推で補おうとするからです。ほとんどの場合，私たちは，自分の解釈が文化の強制力によって方向付けられていることを意識していません。そこで一つの「自己診断」として，英語国民の身ぶりをことばの上からとらえようとするとき，日本語を話し，日本に生活する人間の意識下に蓄積されたものが，どんな形で邪魔だてするものか，自分を実験台に使ってみようと思いたちました。

まずアメリカやイギリスの現代小説のなかから，出来るだけ多くの身ぶり描写を集め，その一つ一つの形を割出し，意味付けをおこなったあと，インフォマントとチェックするという手法をとりました。この場合，インフォマントを使うことは重要な意味をもちます。ことばに凍結された身ぶりに生の血を通わすには，実演して貰うのが一番手っとり早いという利点ももちろんあります。それより大切なことは，表現の当然の前提として，ことばに表われない部分を採り出すには，英語文化に生れ育った人の表現に対する直観的な反応を観察し，こちらの期待に反した反応を集中的にせめていくことが，何よりも確実な方法だからです。私はこの作業のなかで，自分のかけている文化的「色目鏡」の存在を色々な形で思い知らされました。そのなかで，本日は主として言語から来る問題点に言及したいと思います。

私がインフォマントに頼んだのは，近所に住むイギリスの女性でした。初顔合わせにいって雑談をしていますと，夫人の4才になる娘が保育園で書いて来た絵を見せたくて，大人同士の会話に入りこんで来ました。みると重ねた大小の団子から無造作に手足がでている人形の絵です。日本の子供が描く

絵そのままなのですが，娘は胴から左右に出た二本の棒をさし “These are her arms.” といって，私にそれが「手」のない人形であることに気付かせました。“Where are her hands?” と問うと，“She has them on her arms.” と，棒の先に渋々「手」をかきたしたのです。

そのときまで，迂闊にも「手」イコール “hand” 式の考え方で，「人間には二本の手がある」に当る英語は “Man has two hands.” ぐらいに考えていました。ところがこれに近いのは，むしろ “Men has two arms.” だったのです。それも不完全な相当句でしかありません。厳密に，日本語の「二本の手がある」と全く同じことを英語で言おうとするには，“Man has two arms; on each arm he has a hand.” と，大変なまわりくどい表現をしなければなりません。

「手」に1語で対応することばが英語にないとすると，万才のような hand も arm もあがるしぐさを英語ではどう表現するのだろうかと，次々に疑問がわいてきました。それと共に，あれほど確実に「手」は「手」，「足」は「足」と思っていたものが，にわかにあやしくなり，身ぶりを云々する前に，自分の体を英語でとらえ直す必要があると思うようになりました。

調べが進むにつれ，言語が違うと，体の各部位を表わす名前が違うばかりでなく，そのさし示す範囲も違うことが明瞭になってきました。たとえば，“head” といえば普通「アタマ」のことだと考えられています。しかし「アタマ」が主として顔面を含まぬ頭髪に掩われた部分をさすのに対して，“head” は顔面も含めた頭部全体の意味範囲を有しています。中学一年のとき，“He has a hat on his head.” などの文で初めて出あった “head” が，たまたま日本語の「アタマ」と重なっていると，私たちは二つは同じものと思いこんでしまいます。英語のある単語の使い方が，日本語のある単語の使い方とある場合に一致しても，あらゆる場合に一致するとは限らないという言語事実を受入れることはむずかしいようです。学年が進み，むずかしいものを読むようになって，“head” が「アタマ」と違った意味に使われ，「あの男の “head” には歯が一本もない」などという表現に出あうと，英語は「妙ない

い方をする」と片付けて，“head”の意味範囲をあらたにとらえようとはなかなかしません。

名前にずれがあるのは「アタマ」ばかりではありません。日英間でずれのない身体部位の名称を探すのが困難なほどです。日本語で明確に名前を与えられている部位が，英語では「無視」されていることさえあります。「鼻の下」がその例です。夏目漱石の『道草』の英訳を原文とつきあわせて読んでいて，初めてそのことに気が付きました。「島田は鼻の下の長い男であった。その上往来などで物をみるとき必ず口を開けていた」という一文が，英訳では “Shimada has an unusually long *upper lip*...” となっているのです。「長い上唇」とは何事かと，早速インフォマントのもとに走りました。彼女は私の指さす「鼻の下」を見ながら，いつもの敏感な反応とは違って，しばらく考えこんだ末に漸やく，「その部分をとりたてて，話題にしたことはないが，あえていうなら，“upper lip” だろう」と，歯切れの悪い答え方をしました。特定の名前のないところに，名前をいえといわれて当惑したのでしょう。しかし，きいた私としては，これだけ見た目にも歴然と区別できる部分に英語が名前を与えていないはずはないという期待感があったのです。考えてみると，私たちがそれだけ区別を意識するのも，日本語がその部分に独立した名前を与えているからともいえるのです。ことばの上で「上唇」と区別しない英語国民は，私たちほどその存在に意識的でないのでしょう。ことばというものは，このように私たちの認識に不思議な働きかけをするものです。

私たちは，体なら体というものをそのまま認識しているのではなく，有意義と思われる形に分節され，名前を与えられたもの，すなわち言語化されたものを頭に入れています。体の側には，どこからどこまでを一区切りとみなさなくてはならないという必然性はありません。当然言語が違えば区切り方も異なるのですが，一旦，母国語の区切り方を身につけると，それが唯一の絶対的な区分であるかのように思いがちです。外国語を習うときにも，その言語に特有の切りとり方を知ろうともせず，もっぱら母国語の区分にそっ

て，その別名を覚えることに努力を集中します。それほど母国語の言語習慣は，私たちのなかに深く根をおろしているといえましょう。

体の切りとり方ばかりか，表情の切りとり方についても同じことがいえます。言語が違うと，同じ表情やしぐさも，そのどの部分を言語化の対象とするかによって，違ったものに切りとられがちです。たとえば，日本語に生まれ育った私たちは，満悦感にひたる人間の目は柔和に「細まる」とみます。こればかりは人種をこえて万人に共通と考えますが，英語で育った人は，満悦に「目を細める」などあり得ないことだと思っています。怒りを抑えた険しい表情に「細まった目」が出現すると考えています。

実際の表情写真をみますと，日本人であれ，英語国民であれ，満悦の表情は，目の線がなごんで目尻にしわがより，目が細まっているのがわかります。一方，相手を見すえた鋭い目も，目巾がせばまって睨むような厳しさが出ています。日本語では，満悦の顔の代表に「細められた目」が選ばれるのに対し，英語はこれを切り捨て，目の輝きや，ほころびた口もとを言語化の対象とし，「細められた目」は陰険な表情の代表としています。一旦言語化の対象からはずされると，笑いに目が細まっても，細めたという自覚がなく，日本人が喜ぶとき「目を細める」ときいて，英語国民は信じ難い気持になるのです。

このような切りとりの違いを十分わきまえておかないと，実際には似ても似つかない日英のしぐさを同じと思いこんだりします。日本人と英米人の行動様式の比較をおこなったある本を読んでいましたら，同じ身ぶりも文化によって意味が異なるという一つの例として，「日本人は疲れ切ったときに『アゴを出す』が，英語国民の間でこれは怒りを表わす」と書いてあるのが目にとまりました。

これを読めば，なるほどところ変われば品変わると思いたくなりますが，実際は言語間の切りとりの違いからおきた「誤解」です。たしかに，日本語で疲れたときに「アゴを出す」といいます。英語は，挑戦的に人に向かうとき「アゴを出す」といいます。同じでたはずの「アゴ」も，ことばの上で同

一にすぎず，現実の姿は全く別個のものなのです。

「あごを出して」いる姿としてすぐに思いうかぶのは，ゴール寸前にさしかかった長距離ランナーの苦しげな表情です。しかし，言語の側からそのように見るように仕向けられていない英語国民は，一向にそこに「出たアゴ」など認めようとしません。インフォマントは，口もとが不景気に垂下しているだけだ（down in the mouth）と主張して，一歩も譲りません。同じものをみても，それをどうとらえるか，人間は言語からかなり指示をうけているようです。

英語国民が「あごを出す」と認めるのは，相手を呑むように昂然と顔をあげてみる高姿勢においてです。英語がこの姿勢を「アゴ」を中心に切りとるのは，「アゴ」に対する価値のおき方とも無関係ではないようです。英語国民は人柄の滲み出る場を「アゴ」ときめています。自己主張を通じて，この世に生きる場を築いていく戦斗的な社会では，堂々と相手に向けた顔の先端にあるものとして，「アゴ」が特に注目を集めるのも当然かも知れません。分際を重んじて低姿勢で世を渡る日本人のふせがちな面にややもすればかくれてしまう「アゴ」とは，そのもつ意味もおのずと異なるのでしょう。

オスカー・ワィルドは戯曲 *The Importance of Being Ernest* のなかで，一人の登場人物に「今の世に２つの欠けたものがある。確固たる信念と立派な横顔だ。人の生きざまは大体 “the way *the chin is worn*” できまるもの。さあ，もう少しあごをお出し」と言わせています。このような文化に育った人間に，へたばると人間の「アゴが出る」などと認めさすことは到底不可能な話です。

自己顕示的な攻撃性のあらわな「つき出たアゴ」より，自己抑制により大きな価値をおく日本人は，「ひいたアゴ」に凛々しさを認めるのではないでしょうか。『紳士道と武士道』という日本とイギリスの文化の比較をこころみた本のなかで，著者トレバー・レゲットは，この点にふれ，「西洋人は『アゴを引く』ことを優柔不断，意志薄弱とみなすが，日本人は意志強固だとみる」と書いています。ここでも又ことばと現実とが混同されているように思

われます。英語国民は同じひいた「アゴ」に対しても，鋭い目や，緊張した口もとに攻撃性を見る限り，突き出した「アタマ」の方に焦点をおき，「引いたアゴ」を黙殺します。私の示した表情写真で，インフォマントが，「引いたアゴ」を認めたのは，戦斗意欲を失った弱気な表情においてのみでした。

詩人のようにことばのおしきせをふりきれる人種はともかく，一般の人はものごとを透明に自分の目で自由にとらえることはできません。言語が引いた線にそってしかとらえることができないようです。そのため，外国語が母国語と違った形で表情を切りとると，その表情をたとえ日に何回となく自分でもやり，人がするのを見ていながら，どんな表情を意味するのか読みとるのに苦労します。

日本語に育った私たちは，驚いたとき「目をみはる」「目を丸くする」という自覚はあります。目を大きくあけるということは，上瞼が押しあげられるということですから，それに伴なって当然眉もあがります。しかし，日本語は，この眉の動きを驚きの表情に結びつけて言語化しませんので，英文で「その話をきいたとき，彼の眉は突然大きくあがった」などと書いてあっても，それが驚きの表情であるとわかるまで手間どります。

眉の話がでたところで，もう一つの眉の動き，怒りに「逆立つ眉」をとりあげましょう。インフォマントに，アメリカ女性の「柳眉を逆立て」て怒る表情写真をみせ，眉にポイントをおいてこの表情を描写するとしたら何というかきいてみたことがあります。彼女は私の予期に反して「眉をけわしく引下げている」と描写しました。日本語では，ムッとして逆八の字をえがく眉の両端に焦点をあてるのに対し，英語は眉間部を中心に切りとるからなのです。英語国民が，怒りに「眉が逆立つ」という日本語の表現をよんだとき，どんなイメージを想定するか，三島由紀夫の『宴のあと』の英訳から紹介してみましょう。このなかで，「怒るとかずの薄い眉は逆立ち，口はへの字に結ばれる」という怒りの表情描写があります。英訳者は，かずの「逆立つ眉」を，「怒髪天を衝く」のあの姿と結びつけ，薄い眉毛が一本一本根もとからピンピン逆毛立ったと解していました。

このように見て来ますと，ことばが文化として一定の色をもち，外界を色付けして，私たちの意識に働きかけるものであることを認めざるを得ません。更にことば以外の文化，非言語的な面においても，私たちは文化に強く条件付けられています。今日の話では，非言語的な側面についてふれることはできませんでしたが，この点に関して発言したアメリカの人類学者エドワード・ホールの言葉を引用しておきたいと思います。「ひとは文化に接し，その文化がつかめないという。或いはつかめたつもりでも実は誤解している。この際分かったとか分からないとかいう問題は，概ね非言語的な意味の問題なのではなかろうか。人間のある行為に対してそれぞれの文化が与える意味付け，非言語的な意味のシステムはまさに文化そのものであり，そのシステムは必らずしも記号化されていない。こういう領域での文化接触にくらべれば，ことばの翻訳はくらべものにならないほど明晰というべきだ」

言語的にも，非言語的にも，私たちは文化の強制の枠の内に存在するものだということをのべて来ました。このような存在だという自覚は，異なった文化に接することがなければ，容易に生まれてくるものではありません。

もちろん異なった文化にふれてもなお，私たちは自国の文化の強制力に流されて，そのまま自国流儀の解釈をおしつけようとするものであることは，今みて来た通りです。しかし，思い違いを思い違いと認めるようになれたとき，新しい世界が開けて来ます。私もさまざまの思い違いを通して，文化に対する一つの見方を学び得ました。すなわち，それぞれの文化に固有の構造があり，その文化のなかで観察しうるものや行動は，その構造に位置付けて意味を知り得るということです。個々の文化が，独自の構造をもったものであるというこの認識が，私たちを自分の文化の絶対的な強制力から解放してくれるのではないでしょうか。無意識に見過して来た自国の文化に対する新しい認識，自分たちとは違った見方，考え方をする新しい世界を知ることによる視野の広がり，外国の文化，とりわけその言語を学ぶ意義は，まさにここにあるのだと思います。

始業式に際して，学長は本学がリベラル・アーツ教育をめざすものである

ことを強調されました。リベラル・アーツ教育においては，外国語が特に重視されています。偏見や固定観念から人間を伸びやかに解放させることをねらったリベラル・アーツ教育にとって，異なった構造をもつ文化の存在に目を見開かせ，自国文化の強制の枠に気付かせる外国語教育は当然重要な意味をもちます。これからの１年，或いは２年，このような観点から外国語学習に意欲をもやしてほしいと思います。